

## 電気・電子工学系 電子デバイス大講座

中村先生の訃報は余りに突然であり、当初はとても信じられるものではありませんでした。3日程前に街角を散歩しておられるお姿を拝見しましたので、全く驚くばかりです。先生は、電子デバイス大講座設立以来の在任者であり、生みの苦しみからその後の充実発展に到るまで、大講座の歴史そのものでした。センサーの研究では、外国学術雑誌の編集長を務められるなど国際的にも高い評価を受けられ、最新の学内施設を実現されて、研究に全力を傾けられました。産業界からは全幅の信頼を寄せられると共に、韓国慶北大学との学術提携を実現されるなど、本学の特徴である産学共同・国際交流を強力に推進されたことは誰しも認めるところであります。順風満帆、先生の長年の夢が、まさに実現の時のご不幸、先生の胸中を察すれば、落涙の極みであります。心から、ご冥福をお祈り致します。

(教授 吉田 明)

我々の電子デバイス大講座は教官、学生共々協力関係を保って開学以来維持・運営されてきた。小講座化しなかった最大要因は先生の我を押さえた丸い人柄にあることを時と共に感じた。先生は大企業(NEC)の、研究所ではなく事業部門の出身である。そのためか、きわめて実践的であり、これが従来の大学になかった点として企業からの関心を強く呼んだ。大学では困難とされてきた半導体集積回路の実験施設を拡充され、教育・研究及び産学協同におおいに力を発揮された。残された我々は従来以上に自立と協調のバランスをもって当大講座の教育・研究活動を発展させ、引いては本学の発展に寄与していきたい。

それにしても、隣室から調子のよい時に吹く口笛が聞こえなくなったのは何とも寂しく、人の世のはかなさを感じてならない。

(教授 米津宏雄)

当初、先生は「大学は研究でなく教育だ」が持論であった。しかし、東横化学(株)との共同研究が始まった

10年前頃から、「大学は研究だ」に急速に変わった。そして、「オリジナリティのある研究とは」について語るのが好きであった。その東横との共同研究には、半端ものの私に実行部隊長の任を与えてくれた。細かい注文は一切なく、研究の自由を与えてくれた。おかげで、ESCA、レーザー、分子線表面装置を作ることができ、ライフワークとしての表面ダイナミクス研究のスタートを切れた。この分野の世界の壁は厚くとも、必ずや、ブレイクスルーしてみせると誓ったが、その矢先の先生の死であった。存命中は、僭越な意見を多々述べて、先生を困らせた。今となつては、恩を仇で返す仕業であったか。(助教授 並木 章)

中村先生と私は、全く同じ年(昭和53年)に当技科大に赴任しました。そのころの創設期に、先生とは、半導体集積回路のためのクリーンルームや、設備のたち上げで色々ご指導頂きました。温厚でいながら、非常に意志の強い方であり、かつ産業界の息吹を大学に持ち込まれたことは、私にとっても得難い体験となりました。また、先生は、外国とりわけ、韓国との研究交流に熱意をもってあたられたことは大変印象深く、口癖のように、これからはアジアの時代であると語られてみえました。先生にとって、まだやりたいことは多々あったと思いますが、これまでの教育研究の実績は輝かしいものであります。ここに、慎んで先生のご冥福をお祈りいたします。(助教授 朴 康司)

中村先生と初めてお会いしたのは、昭和54年の2月名古屋大学の本多先生の部屋でした。そして、4月に豊橋技術科学大学に赴任して以来16年間先生と二人三脚でやってきたと自負しています。58年の初めての海外出張でトラブルに会い、しかたなく二人でレンタカー借りて真夜中に必死の思いでロッキー山脈を運転し、会議のあるジャクソンホールのホテルへ向かう途中に中村先生が言われた「これからこのように二人三脚で